



No.13 《展覧会ポスター》

「青」の画家として知られる佐野ぬい。青色を基調に選り抜かれた色彩を対比させながら画面構成を行う独創的な作風により、戦後の日本洋画界において独自の抽象表現を確立していきました。形と線がリズムを刻み、ハーモニーを響かせ、ニュアンスに富んだマチエールがセッションに加わる心地よい作品世界は、世代を超えて多くの人々に愛されています。

故郷、弘前でフランス、パリに憧れた高校時代から、上京して女子美術大学に学び、母校で後進を指導しながら制作を続け、2023年に90歳でこの世を去るまでの、70年を超える画業を回顧する展覧会です。

会 期 2025.7.19(土)～10.13(月・祝) 開催日数 87 日間 [休館日] 7.28(月)、8.12(火)、8.25(月)、9.8(月)、9.22(月)

会 場 青森県立美術館 [開館時間] 9:30～17:00(入館は 16:30 まで)

観 覧 料 [当日券] 一般 1,700(1,500)円, 大学生 1,000(800)円 ※()は 20 名以上の団体料金
[前売券] 一般 1,500 円 ※青森県立美術館ミュージアムショップで販売

セット券 [佐野ぬい展+コレクション展] 一般 2,000 円, 大学生 1,100 円 ※当日券のみ
※18 歳以下及び高校生は無料 ※心身に障がいのある方と付添者 1 名は無料

主 催 佐野ぬい展実行委員会(青森県立美術館、青森放送、青森テレビ、青森朝日放送、青森県観光国際交流機構)

協 賛 株式会社ラグノオささき

特別協力 一般財団法人 nuit・company

協 力 学校法人女子美術大学、弘前市立博物館

後 援 青森県教育委員会、青森市教育委員会、弘前市、弘前市教育委員会、国立大学法人弘前大学、東奥日報社、デーリー東北新聞社、
陸奥新報社、青森ケーブルテレビ、エフエム青森

関連企画

◎ 7.19(土)【オープニング・ギャラリートัวร์】

佐野壮(作家次男:一般財団法人 nuit・company 代表理事)、藤原晶子(作家アシスタント) ※佐野ぬい展チケットが必要です

◎ 9.23(火・祝)【記念講演会】講師:蔵屋美香(横浜美術館館長)|会場:青森県立美術館シアター

◎【特別ワークショップ】① 7.26～8.24 までの休館日を除く毎日 ② 8.30～10.13 までの土日祝日 (時間 11:00～15:00)

プレス向け内覧会

7.18(金) 13:45～14:45 /集合|美術館 1 階エレベーター前受付

参加ご希望の方は 7.16(水)までに E-mail でご連絡ください。(bijutsukan@pref.aomori.lg.jp)

展覧会の見どころ

◎ 多くの新制作展出品作を含む大型の代表作から、0 号サイズの小品による集合展示まで、100 点を超える作品と関連資料により、独創的な作品世界の魅力を紹介します。

◎ 1946 年、14 歳の年に故郷の街角に建つ百貨店を描いた作品から、逝去する前年の 2022 年に描きあげた新制作展出品作、さらに最後にサインを描き入れた作品、筆を入れ始めたばかりの絶筆までを展示し、70 年を超える創作の軌跡を辿ります。

◎ これまで紹介されることが少なかった学生時代からのスケッチブックやドローイングにより、創作における試みを紹介します。

◎ 棟方志功からの展覧会案内はがきや、表紙画や挿画を手掛けた北畠八穂、石坂洋次郎の著書などから、青森ゆかりの作家たちとの交友を紹介します。

◎ アトリエで使われていた筆や鉛筆をはじめとする創作のための道具により、創作の現場をかいまみることができるコーナーを設置します。

展示作品紹介（概要）

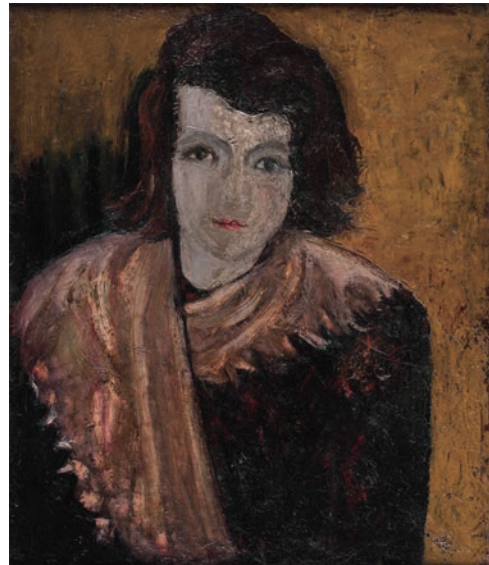
初期の作品

佐野は 1932 年、弘前で菓子店を営む両親のもとに生まれます。店内にはクラシックが流れるティールームがあり、家業の傍ら同人誌を発行していた父の友人である文学者や画家たちが集っていました。

女学校に入学した 1945 年の夏に戦争が終わり、再び上映され始めた欧米映画、特に戦前のフランス映画に心酔していた 10 代半ばの頃、佐伯祐三の画集と出会い大きな衝撃を受けます。パリの街を描く独特の雰囲気に魅せられてこんな絵が描きたいと熱望し、弘前の街をパリに見立てて描きながら、フランスに行きたい、パリの街を歩きたいと思いを募らせ、まず津軽よりパリに近い東京へ行こうと、1951 年、女子美術大学に入学します。



No.1 《かくは入口》 1946 年
52.5×45.5 cm キャンバス・油彩 青森県立美術館蔵



No.2 《自画像》 1951 年
53.0×45.5 cm キャンバス・油彩 青森県立美術館蔵

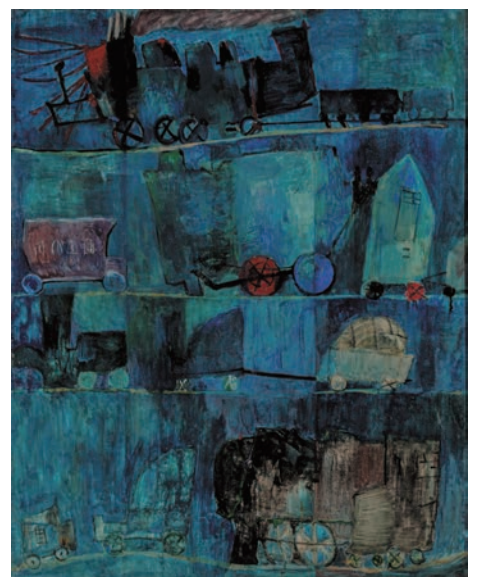
1950 年代の作品

戦後、東京には海外から新たな潮流が押し寄せ、それに呼応するように次々と斬新な芸術活動が生まれていました。佐野は画学生として大きな刺激を受けながら洋画科に学び、卒業後は研究室の助手を務めながら画家の道を歩み始めます。そのとき、創作の要として位置づけたのが「青」という色でした。

1955 年に女子美術大学を卒業。同年、風景や自動車をモチーフに独自のデフォルメを施した画面構成による作品で女流画家協会展、新制作展に入賞、入選を果たし、この二つの展覧会に出品を続けます。



No.3 《青い自画像》 1954-55 年
53.0×40.9 cm キャンバス・油彩
青森県立美術館蔵
※女子美術大学卒業制作の 1 点



No.4 《くるまの唄》 1955 年
91.0×72.5 cm キャンバス・油彩
青森県立美術館蔵
※第 19 回新制作展出品作

1960年代の作品

1960年頃からは、画面から具体的な事物が消えてゆき、60年代の半ばにはダークブルーを基調とした背景にモチーフや文様が浮かんでいるような一連の作品が生まれます。



No.5 《青の歴》 1965年 130.5×162.0 cm
キャンバス・油彩 青森県立美術館蔵
※第29回新制作展出品作

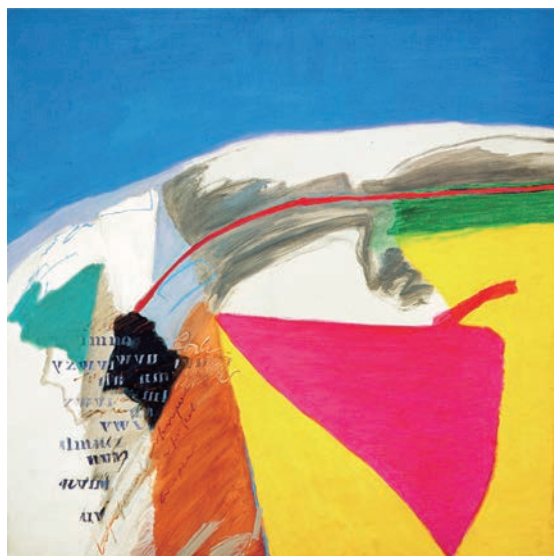


No.6 《青い背理1》 1975年 162.1×162.1 cm
キャンバス・油彩 青森県立美術館蔵

続く60年代の後半から70年代にかけては、多彩な青色に暖色も加わって、明るく豊かな色彩の作品が登場します。薄く塗り重ねられた色面に残る筆の動きの痕跡が、画面に独特のリズムを生み出しています。

1980年代の作品

1980年頃からは、佐野自身が「動く抽象地図」と呼ぶ、タイトルに世界各地の地名が採り入れられた作品が登場します。



No.7 《キングストン北緯18°》 1983年
162.1×162.1 cm キャンバス・油彩 弘前市立博物館蔵
※第47回新制作展出品作



No.8 《キーウエスト130マイル》 1983年 162.0×194.0 cm
キャンバス・油彩 弘前市立博物館蔵
※第47回新制作展出品作

1990年代の作品

1990年代以降は、色とともに音楽を連想させる「ブルーノート」「オペラ・ノート」、そして「余白」「構図」「形」「時間」など、さまざまなイメージを想起させるタイトルの作品が登場します。

画面のマチエールはさらに多様さを増し、いくつもの不定形な形と線が隣り合い、重なり合ってつくりだす心地よい空間が広がります。色彩はいつそう洗練され、赤や黄色、白などが目に飛び込んできますが、作品全体を支える要となっているのは、やはり多彩な「青」です。

『絵は、長い時間を経て、少しずつ変化していった。

テーマも、イメージも、技法も、自然に変わったり、意識して変えたり様々だった。

しかし「青」は私の絵の系譜の中では、いつも変わらぬマイカラーだった。』（佐野ぬいのエッセイより）



No.9 《オペラ・ノート》 1991年 196.0×242.0 cm
キャンバス・油彩 青森県立美術館蔵
※第55回新制作展出品作



No.10 《ブルーノートの構図》 1994年
212.0×182.0 cm キャンバス・油彩
青森県立美術館蔵
※第58回新制作展出品作



No.11 《青の時間》 2014年 74.0×120.0 cm
キャンバス・油彩 青森県立美術館蔵
※弘前市民会館に設置されている
スタンドグラス《青の時間》の原画

晩年の作品

最後の新制作展出品作となった大作《セルリアンブルーの街》は、タイトルの通り、セルリアンブルーをはじめ青色を基調に構成された画面から、街を吹き抜ける透明な風が感じられるようです。

佐野が創作において最も大切にしていた「青」。それは「憧憬」の色であり、また「郷愁」の色でもあります。夢と憧れを胸に故郷を旅立ち、人生で出会ったさまざまな「青」を作品に投影しながら、佐野はまだ見ぬ「青」を求めて絵筆を握り続けました。

自身の「青」の原点を、故郷の長い冬の終わりに仰ぎ見た、雪どけの清々しい青空と語っていた佐野ぬい。その未完の絶筆は、明るい空のような「青」色だけが塗られたまま、アトリエに遺されていました。



No.12 《セルリアンブルーの街》 2022年
181.8×227.3 cm キャンバス・油彩
一般財団法人 nuit・company 蔵
※第85回新制作展出品作

佐野ぬい略年譜

- 1932年 青森県弘前市に生まれる。
- 1945年 弘前高等女学校に入学。
- 1951年 青森県立弘前中央高等学校を卒業。女子美術大学芸術学部美術学科洋画科入学。
- 1955年 女子美術大学芸術学部美術学科洋画科卒業。同大学芸術学部助手となる。
第 19 回新制作展初入選。第 9 回女流画家協会展 T 夫人賞受賞。
以後、新制作展（2022 年まで）と女流画家協会展（1991 年まで）に出品。
- 1961年 女子美術大学芸術学部専任講師に就任。76 年助教授、87 年教授となる。
- 1986年 弘前市立博物館で個展「スペーストゥデイ」開催。
- 1989年 池田 20 世紀美術館（伊東市）で「佐野ぬいの世界」展開催。
- 1994年 東京文化村ギャラリー（渋谷）で個展「青の構図」開催。女子美術大学大学院美術研究科教授に就任。97 年研究科長となる。
青森県褒章文化功労者となる。
- 1996年 パリ、G a l e r i e T a m é n a g a で個展開催。2000 年、2003 年にも
同画廊で個展開催。
- 1999年 女子美術大学退職。同大名誉教授となる。
- 1999-2006年 女子美術大学大学院客員教授。
- 2001年 青森県文化賞受賞。
- 2004年 第 26 回損保ジャパン東郷青児美術館大賞を受賞し、「佐野ぬい展 ―遠い
様式・青の構図」開催。
- 2005年 青森県立郷土館で個展「青いトボス」開催。東奥賞受賞。
- 2007-11年 女子美術大学・女子美術大学短期大学部学長を務める。
- 2011年 何香凝美術館（深圳市、中国）で「Bleu Nuit 佐野ぬい展」開催（女子
美術大学 110 周年記念）。
- 2012年 瑞宝中綬章受章。
- 2014年 弘前市民会館にステンドグラス《青の時間》設置。
- 2015年 弘前市名誉市民となる。弘前市立博物館で「青の時間 ― 佐野ぬいの世界」
開催。
- 2021-22年 弘前レンガ倉庫美術館展覧会「りんご前線」出品。
- 2023年 8 月逝去。
- 2025年 弘前市立博物館で「佐野ぬい追悼展 monochrome、そして Blue」開催。



制作中の佐野ぬい

画像提供のご案内

本文中で紹介している No.1 ～ 12 の作品、及び No.13 の展覧会ポスターの画像をデータで提供いたします。希望される画像、媒体名、御社名、ご担当者、ご連絡先をお書き添えの上、E-mail でご連絡ください。（bijutsukan@pref.aomori.lg.jp）

〔画像貸出条件〕

- 1 本展広報目的での使用に限ります（会期終了まで）。使用後は、データの破棄をお願いいたします。
- 2 展覧会名・会期・会場名のほか、画像の使用時には画像に付記しているクレジットを必ずご掲載ください。（寸法と材質技法、※以下は省略可）
- 3 作品画像は全国でご使用ください。トリミングや文字を重ねるなど画像の加工・改変、部分使用はできません。
- 4 転載、再放送など、二次使用される場合は別途申請をお願いいたします。なお、展覧会終了後の二次使用はできません。
- 5 WEB にてご掲載の場合には、コピーガードを施しダウンロード不可にしてください。
- 6 基本情報、画像使用などの確認のため、ゲラ刷り・原稿段階のものを「広報担当」にお送りください。
- 7 掲載・放送後は、必ず掲載紙（誌）、掲載 URL、同録 DVD を「広報担当」までお送りください。

問い合わせ先 | 佐野ぬい展実行委員会（青森県立美術館内）

〔広報担当〕 森、石山 TEL 017-783-3000 bijutsukan@pref.aomori.lg.jp